

ミュージアム 通信

江戸時代にあった 浮世絵の紅を求めて

[新商品のご紹介]

螺鈿や蒔絵を施した
漆製紅パレット
小町紅「板紅」

[かわら版]

伊勢半本店 紅ミュージアム
リニューアルオープンのご案内



溪斎英泉「今様美人拾二景 おてんぼそう」／彫・摺 立原 位貫

江戸時代にあった浮世絵の紅を求めて

**江戸の錦絵を復刻する
プロジェクトが始動**

二〇〇八年の春、以前から当社の紅を使って木版画の制作を行っている立原位貫氏より興味深い企画が舞い込んだ。

先般、富山県の旧家の土蔵から、江戸末期を代表する浮世絵師（歌川国芳や三代歌川豊国、歌川広重ら）が下絵を描いた錦絵の版木三百六十八枚が発見された。これを国立歴史民俗博物館が入手し、調査・研究を実施。その中から歌川国芳の作品を一点、復刻する企画が立ち上がり、浮世絵復刻の第一人者・立原位貫氏に依頼が成された。

彼は江戸当時の手法、絵の具、紙を独学で研究し、再現性の高い浮世絵の復刻やオリジナル作品の制作を長年行っている木版画家。（表紙の錦絵は、当社の紅を使用して復刻し

た作品)。海外の著名な博物館や美術館からは、浮世絵の復刻や修復の依頼が後を絶たないという。

本企画は、当時の制作過程や、彫り、摺りの技術が新たに解明される可能性を秘めており、非常に高い研究価値を持つ。この重責を担えるのは、立原氏の他にはいなかった。そして、立原氏が復刻に取り組み全過程を、NHKが記録することとなった。復刻する作品は、歌川国芳画の「達男気性競 金神長五郎」である。復刻に

あたり特に重きを置いたのが、当時使われていたものに極力近い絵の具と紙を使うこと。錦絵に使

われた絵具の大抵は、現代も手に入る。しかし、錦絵において特に重要な色であった紅だけが、当時のもものと比べて色や粘度などが違うため改良する必要があった。また、紙も当時により近いものを突き詰めて開発する必要があった。紅の開発は当社に、紙の制作は高知県の紙匠・池加津夫氏に立原氏から依頼が成された。



「達男気性競 金神長五郎」・歌川国芳・山口県立秋美術館・浦上記念館所蔵

当社はこの依頼に対して文化的意義と現今唯一の紅屋としての使命を感じ、立原氏のディレクションのもと絵具用紅の開発に取り進むことを決意。これを機に、当社の挑戦が始まったのである。

絵具用紅における江戸と現代の違い

当社では、江戸時代に化粧料の紅以外にも菓子の色付けや、錦絵等の絵画に用いる絵具として、細工紅(さいくべに)という商品を販売していた。現在は同様の商品を、食紅として和菓子店向けに販売しているが、江戸時代の錦絵に使われていたような黄色を含んだ紅ではなく、鮮やかな紅が特徴。当社は創業当時より今日まで変わらぬ製法を継承しているが、この細工紅の製法に関しては「紅と浮子(澱粉をお湯で溶いたもの)を

混ぜる」との記述しか残っておらず、詳細は不明だった。

今回、絵具用紅の開発にあたり、立原氏が提示した条件は、次に挙げる二点。①江戸時代の錦絵に使われた紅の色には、時代や作者によって違いがあるが、本企画では歌川国芳の作品に見られる、

朱色がかった紅色を目指すこととする。②現代の紅は、紙の繊維内に留まらず、裏面にまで達してしまうのでこれを解決すること。②に関しては、下の写真を見ていただきたい。右側は当社所蔵の江戸の錦絵、左側は立原氏が当社の紅で摺った作品である。通常、絵具を摺ると紙に染み込むのだが、裏面にまで達する程ではない。しかし、左側は紅が裏面にまで達しているのがお解かりいただけるであろう。

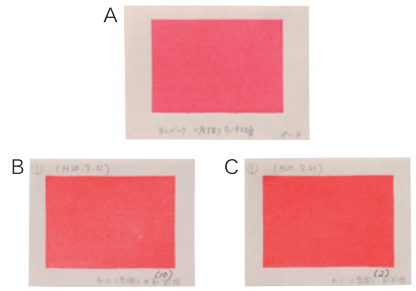


精製するのではなく、残すことの難しさ

当社は、紅花の花弁から黄色色素や残留物を極力取り除き、赤色素Ⅱ紅を採取している。そのため、赤の色価(色の濃さを表す数値)が高いというだけではなく、粒子が細かいのが特徴である(摺り見本①-A)。

この依頼を受け紅匠の川西は、通常より黄色色素を多く残すことと、粘度を持たせるために色素以外の残留物を多く残すように工夫して試作を繰

摺り見本①



り返した。

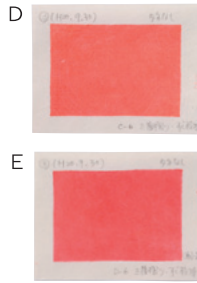
初回は、製造途中に黄色色素を加え、紅とともに採取することを試みた。紙に紅を刷いてみたところ、赤色素と黄色色素が分離してしまい上手くいかなかった。次に通常の製造では、紅花の花弁を何度も水洗いして黄色色素を極力取り除くのだが、これを減らして紅を採取した。しかし、これでもさして黄色を含んだ色にはならず、赤が濃いままであった(摺り見本①ーB)。

れないので、思いきって製法自体を変えた。黄色色素は水に溶け、赤色素はアルカリ性になると溶ける性質がある。通常当社では、紅花の花弁から赤色素を溶かし出した液に、ゾクと呼ばれる麻の束を浸して何度も染め付ける。次にゾクから絞り出した濃縮液に、酸液を加え紅の色素を分離させる。最後に紅の粒子が沈殿した濃縮液を、濾過して紅を採取する。ゾクを使うことでより純粋な紅を採取することができるとは、ゾクを使わない製法を試みたところ色に変化が現れ始めた(摺り見本①ーC)。また、紅が紙を貫通する問題は、この時点で解決した。

この結果を受けてゾクを使わない製法で、より黄色色素を多く残すにはどうすればいいのかを突き詰めていった。試作を

しては立原氏に試し摺りをしてもらい、色を確認すること数回。摺り見本②のDとEの中間にあたる色が、正解の色といふところまで近づいた。しかし、その微妙な調整が難しかった。

摺り見本②



本来、絵具とは色を混ぜて作るものなので、浮世絵に摺られた色に合わせる紅を作ること自体が非常に難しいことであったが、川西は紅匠としての威信をかけて試行錯誤した。そして、試作を重ねること十数回、ようやく国芳の紅色が完成した。

試行錯誤の末に甦った江戸の錦絵

今春、江戸時代の人々が目にしていただろう鮮

明な色、シャープな線で描かれた錦絵が甦る。今日、我々が目にする錦絵は経年変化している。本企画により復刻した作品は、きつと大きな驚きと感動を与えてくれるであろう。

本企画を追ったNHKの番組放送をぜひご覧ください。

【木版画家・立原位貴プロフィール】

昭和51年より浮世絵版画の制作・研究を開始。以降、数々の浮世絵復刻を手掛ける。昭和57年ニューヨークに渡り、ジェニファ・バートレット氏の作品を木版画指導。同市近代美術館にて作品が永久保存される。故・郡司正勝氏(早大名誉教授の「かき夢幻」表紙絵制作。平成6年浮世絵版画の色彩分析に関する研究論文を国際色彩学会にて、企業と共同で発表。また、グイヤモンド社より「色彩から歴史を読む」を共同執筆。最近では連作「竹取物語」が江國香織氏の現代語訳を得て、古典物語絵本「竹取物語」(新潮社)として出版される。



〈絵具用紅の発売を予定〉

当社では、本企画で取り組んだ絵具用紅の製品化に向けて、準備を進めております。こちらでも期待ください。

■放送予定■

BShi 『ハイビジョン特集・幻の色・よみがえる浮世絵(仮題)』
2009年4月12日(日) 22時~23時29分

NHK総合 『ワンダー×ワンダー 幻の色 よみがえる浮世絵(仮題)』
2009年5月16日(土) 22時~22時48分

*放送日時は、予告なく変更になる場合がございます。詳しくは最新の番組予定をご覧ください。

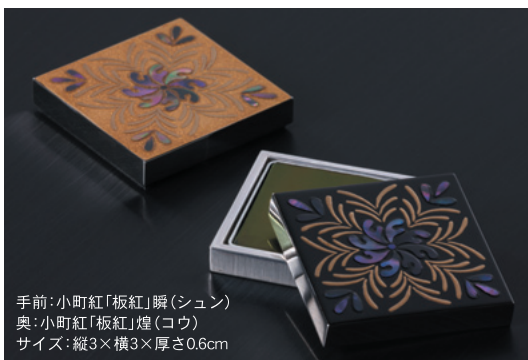
二〇〇九年四月十日・五十個限定発売

螺鈿や蒔絵を施した漆製紅パレット・小町紅「板紅」

これまで板紅開発リポートを、本誌で二号に渡りご紹介して参りましたが、この程ついに完成いたしました。その魅力をご紹介します。

板紅は、江戸女性が愛用した携帯用の紅入れ。それを今様にしたのが本品です。現代女性が気兼ねなく携帯できるよう、本体は強度や耐久性を考慮して銀製に。上蓋にのみ漆を焼き付け、加飾を施しています。

「板紅」瞬は、漆黒の美しさが際立つ呂色仕上げ。「板紅」



手前：小町紅「板紅」瞬(シュン)
奥：小町紅「板紅」煌(コウ)
サイズ：縦3×横3×厚さ0.6cm

煌は、漆表面に梨地粉を蒔き

詰め、華やかな雰囲気に仕上が

ています。加飾の意匠は、稲

見さんの受賞作品「波の花」を

踏襲。脆くて折れやすい貝を

切り抜いて貼る螺鈿技法と、

蒔絵で表現した力作です。精

緻な技が醸し出す品格ある美

しさは、宝飾品にも負けない

存在感を放っています。

今回は紅ミュージアムのリ

ニューアルオープンを記念し、

漆工品としてはお値打ち価格

な六万三千元で販売。紅はリ

フィル式で、初回以降は六千

三百円で販売いたします。一

点一点、丹精込めて仕上げた

手仕事品のため、五十個限定

発売となります。

江戸時代には、漆工や陶芸、

金工など工芸の美を愉しむ文

化がありました。「現代女性に

日本の工芸の良さをお伝えし

たい」という思いから、手の出

しやすい価格帯で製品化でき

るよう、漆芸家の稲見なつえ

さん、銀胎を作った職人さん、

当社とで試行錯誤して開発に

取組みました。女性にとって

身近である化粧道具「板紅」と

いうアイテムが、工芸の魅力

と出会うきっかけとなると幸

いです。



帯地を使った
板紅の専用ケース付き。

※「波の花」とは、昨年開催した当館特別展「甦る

江戸の化粧道具―板紅」に出品した稲見さんの作

品名。開催前に行われた有識者による作品審査会

で準グランプリを受賞。また、来館者による作品

人気投票では、一位を獲得した。

【稲見なつえプロフィール】

石川県立輪島漆芸技術研修所で技術の習得に励

んだ後、漆芸家として活動を開始。蒔絵や螺鈿な

ど精緻な技が溢れる作品を制作しています。

かわら版

Information

■伊勢半本店 紅ミュージアムリニューアルオープンのご案内

当館では、2009年4月10日(金)より常設展示をリニューアルいたします。資料及び情報を追加するとともに、構成を再編成してこれまで以上に解りやすい展示を目指します。資料展示はおよそ80点。江戸時代の紅屋と生産農家との取引文書や、江戸後期から末期にかけての化粧道具など、当館ならではの資料の数々をご覧ください。一度ご来館いただいた方にもお楽しみいただける内容です。お気軽にお越しください。



定家文庫 江戸時代末期

※伊勢半本店 紅ミュージアムは、リニューアル準備のため2009年3月23日(月)～4月9日(木)まで休館いたします。

Since 1825 伊勢半本店 紅ミュージアムのご案内

●開館時間／午前11時～午後7時 ●休館日／毎週月曜日 ●入場無料
(月曜日が祝日または振替休日の場合は、翌日が休館日となります)

東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F TEL&FAX:03-5467-3735
東京メトロ銀座線・千代田線・半蔵門線「表参道」下車B1出口より徒歩12分

<http://www.isehan.co.jp>